

## Vol.9 唯一無二の機能主義の街ズリーン

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。1979年渡米。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペー等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

### 忘れ去られた街ズリーン

2度目にブルノを訪ねた筆者に地元の建築家が、東方約70kmにあるズリーン(Zlin)という街を見せたいという。ブルノはトゥーゲントハット邸、それでお仕舞だったのを恥じた筆者だが、教科書で習った「遺伝の法則」のメンデルがいたのもこの町だ。曲木の椅子で知られるトネットの森を横目に、ナポレオンがオーストリアとロシアの連合軍を撃破した戦場、アウステルリッツを経路に入れてもらって、ほとんど物見遊山の気分。

そうこうするうちに旧式のスコダが街に乗り入れ、外の様相が一変した。右も左も対候性レンガとサッシのファサード、コンクリート柱が一樣なりズムで過ぎ去ってゆく。しかし単調さに辟易するどころか、ホッとすから不思議だ。成田から高速を下りたリムジンバスの車窓に、品川辺りで受ける印象の正反対。建物にヒエラルキーに応じた外観を与えるという、都市計画のABCに反しているのだが。

### 村の靴屋から世界のバチャへ

この、標準化されたズリーンのプリモダン・ニュータウンは、村の靴職人バチャの一家に由来する。

その8代目トーマス・バチャ(Tomáš Bat'a、バタとも表記)が1894年、職人の工房をマニュファクチュアに変えたのが、ことの発端だった。1905年には職長を連れてアメリカに渡り、靴工場の一労働者として、資本主義的生産の功罪を体験する。そして帰国後、最新の機械を次々に導入、山を買って木材を確保し、運河を掘り、独自の発電所を建設。戦時下のオーストリア帝国に数百万足の軍靴を納入し、業界の第一人者となった。

そして1918年の母国の独立を機に、従業員で膨れ上がる故郷の村ズリーンを、モダンな工業都市に変貌させることに着手する。デトロイトを訪ねてフォードの生産システムを体得し、折からの経済不安に揺れるヨーロッパ

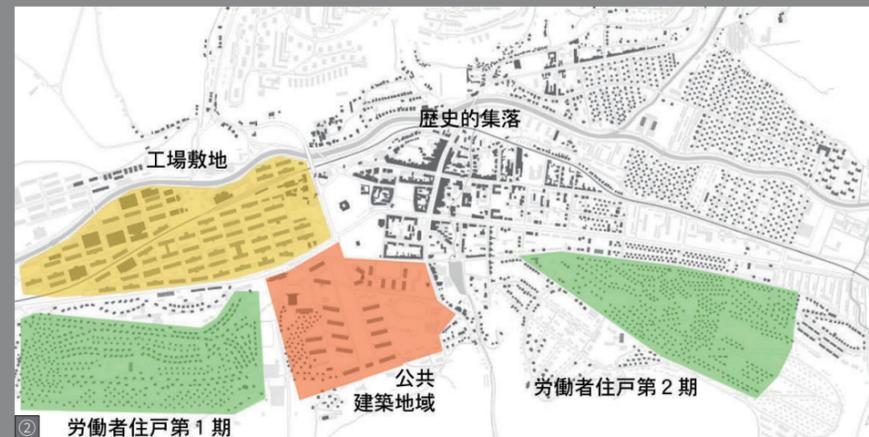
諸国に進出して職場を供給し、物流網を築き上げて、アルゼンチンの皮革とマレー半島のゴムを確保した。

1923年、トーマス・バチャは市長に当選する。1918年に5,300人だった住民が、14年後には2万6,400人に膨れ上がり、官民が一体(実際は同一者)となって、労使双方ウィンウィンの都市が建設された。だが1932年、スイスの式典へと、荒天に逆らって離陸した飛行機が墜落し、トーマス・バチャは帰らぬ人となる。事業は義理の弟ヤン・アントン・バチャに引き継がれ、その躍進は止まらなかった。

### 実利的なズリーンの都市計画

経営者は、独自のビジョンを持っていた。自らの体験から、労働者たちのニーズも把握していた。そして彼らには、専門家が身近にいた。バチャが自邸の設計を依頼した、プラハ・アカデミーの教授ヤン・コテラだった。師オットー・ワグナーの近代の捉え方を引継ぎ、建築の社会的使命を信じる筋の通った建築家、労働者を巡る都市の問題にも通じていた。「生産と住」の新しいあり方を模索する街ズリーンの青写真は、コテラに委ねられた。緑の平地にゆとりをもたせて中心的機能を配し、その一面を工場建築群に担わせること、そして労働者たちには、効率を優先する集住ではなく、庭付きの二戸・四戸がなだらかな高みに提案された。それ以降バチャ兄弟は、『庭園のなかの工場』をモットーとした。

施主である2人が頑として買いたことがあった。とにかく建設が迅速に捗ること、そして、アカデミックな自己主張に耳を貸さないこと。だからお鉢は、ブルノの機能主義建築家たちに廻ってこなかった。CIAMの首謀者であるスター建築家ル・コルビジエが、最盛期にあるバチャ社に参画をオファーするも軽いなされ、町外れの川沿いに独自のアイデアをご自由に、という依頼に止まった。「線状都市」の伏線だという専門家の指摘がある。



②ズリーン市建設物配置図、加筆筆者 ③ズリーン新設公共建築群、竣工当時(1927-38) ④トーマス・バチャ記念館外観、竣工当時(1933)、フランティシエフ・ガブラ ⑤トーマス・バチャ記念館インテリア、竣工当時(1933)、フランティシエフ・ガブラ ⑥昇降する社長執務室、21号館インテリア、空調完備 ⑦昇降する社長執務室、21号館インテリア、給水完備 ⑧バチャ靴工場第21号館(1935-39)、リノベ後の概観、フランティシエフ・ガブラ ⑨⑩⑪⑫⑬ズリーンのビデオ・ショット(2006年4月) 出典: ②筆者アーカイブ ③④⑦⑧ウイキ・コモン ④⑤ズリーン市アーカイブ ⑨⑩⑪⑫⑬⑭筆者撮影



### 施設と都市のモジュール設計

コテラが亡くなったあと、その弟子フランティシエフ・ガブラ(1891-1958)が計画を引き継ぐ。学生時代から面識のあった施主の信頼を獲得した彼は、32歳の若さでバチャ社のチーフ建築家に就任した。プラハでアートを志したが、後に工芸をプレチュニク、そして建築をコテラに学んだという、中欧建築のゲノムの塊りのような存在ではある。

効率を第一義とする施主に応えるべく、ガブラは全ての平面を6.15×6.15mのモジュールに落とし込む。そして、柱をそのまま見せてファサードを分節し、用途に応じて異なるサイズのサッシが固焼きレンガと共に、インフィルとして施工された。腰壁の仕様を変えたり、床版を受ける梁をファサードに見せたりして、建物の表情に変化を与えている。

彼は師コテラのマスタープランを焼き直して、工場を整然と並ぶ単体の集合とした。そして、その建物群とサイズを同じくして、百貨店、ホテル、学校、劇場、労働者クラブなどの建物が中央道路を挟んで配され、全てが一体に響きあって、シティー・スケアブが醸しだされる。

### 建築的ハイライト

そういう建物が並んでいるが、注目に値する建築が2棟ある。ヘッドクォーターたる21号館と、急逝したトーマス・バチャの追悼館だ。両者とも規定のモジュールで計画されているが、巧みな細部の操作によって無表情に陥ることがない。我々の知るラーメン構造の学校校舎は、お決まりのように鈍重だが、そうである必要はないのだ。

前者はバチャ社の頭脳的機能を果たす建物であり、都市景観のハイライトとして他の2倍以上の高さを有している。施主の気質に応じて、当時最先端の環境設備や建材が投入された。その極みが、エレベーター化された会長室。部下を呼び寄せる時間の無駄を省き、各階に配された諸部門に、直接アクセスするためだった。ホールの石貼りに、機能主義に生き延びたウィーンの建築ゲノムを感じて戴けるだろうか。

後者はホール建築で、空間に象徴性を与えるために柱間を曇りガラスのサッシとし、丸柱が採用されている。当時の写真から建築的クオリティーが窺えるが、今日内部空間は残っていない。

### 科学としての都市計画の功罪

ビルを建てれば、足許の設計が地域の生活に影響を及ぼすこととなる。しかし多くの場合、それは実利的ニーズの充足プラス植栽で終わってしまう。日本の都市はその連続でしかない。本店街丸の内だって新渋谷だって、本質的にはそうなのだ。でも仮に、施主と行政の利害が完全に一致するとしたら? そういふ、不可能に近いことが起こって実現された都市。ズリーンの存在意義は、その一回性にこそある。

他面、今日では都市計画を社会学や経済史を抜きにして語ることが、ほとんど不可能となった。行政が論拠を求めて、多分野の学者を諮問委員会に呼ぶからだし、建築サイドも弱腰なのだろう。しかし人の営為には、学問に落とし込めない部分が残るものだ。それを見逃がさないことが、建築をする所以ではなかったか。

近代化(産業革命)の波に呑み込まれるのに抗うベクトルを持つ、ウィーンの建築的ゲノム。今回は戦間期のウィーンの建築家、フランクのお話をしよう。(続く)



①バチャ靴工場第21号館 1階ホワイエの石貼り、フランティシエフ・ガブラ(筆者撮影)